

初唐の三大家により楷書体が完成した後、次の盛唐では楷書よりも行書・草書に優れた書人（李邕など）が現れ、さらに中唐にかけて、くだけた草書である狂草が流行する。初唐より太宗の王羲之崇拜により唐代の書法は、特に行草において王羲之が典型とされ、盛唐の玄宗の開元・天宝年間（713-756）は王羲之の書風が最も流行した。それらは唐代最盛期の文化を反映している。しかし、その多くは王羲之風の俗書であった。王羲之崇拜とその流行により王羲之の根幹精神を見失い書法が形式化していくと、伝統を破壊しようとする反王羲之の新しい動きが出てきた。時代は中世の貴族社会体制がしだいに崩壊しだし、芸術にも革新の風が吹き始めてきた。

唐代は漢詩の最高峰の時代である。それらは『唐詩選』などでよく知られている。盛唐では中国史上最高の詩人といわれる李白・杜甫だけでなく、王維・孟浩然・岑参・高適・王昌龄などの偉大な詩人が活躍した。

李邕（りょう）（675-747）李北海とも呼ばれる。江蘇省揚州江都に生まれた。若くして則天武后に仕え後玄宗皇帝に仕えた。

豪奢放縱で硬骨な性格のため、たびたび左遷されたり、事件を起こしたりし、最後は宰相李林甫に憎まれて鞭打ちの死刑になつた。70歳であった。彼は義を重んじ士を愛した。歴代の宰相に憎まれたのは、士人の間での厚い人望に対する嫉妬からだといわれている。李邕は盛唐の詩人でもあり、李白や杜甫と交際した。最初に杜甫を評価したといわれる。また文章がうまく能書であつたので高位高官の人々に人気があり、依頼され作つた碑文は800とも言われ、その謝礼で莫大な財を成したと伝えられる。現存しているのは十数種類だけである。碑も自ら刻したものが多いらしい。後世に大きな影響を与えたその書は、王羲之の法を基本にし、特に『集王聖教序』を学んで行書を得意とした。魏晋の書法を基本に新しい書風を作りだした。この行書の書風は人びとから好まれ、盛唐の文化を象徴している。後代の蘇軾や黃山谷や趙子昂などに大きな影響を与えた。代表的な書碑には、「李思訓碑」「麓山寺碑」「法華寺碑」「少林寺戒壇銘」「李秀碑」「東林寺碑」などがある。保守派。

麓山寺碑（開元18年・730）53歳の作。筆力雄渾な筆勢で、

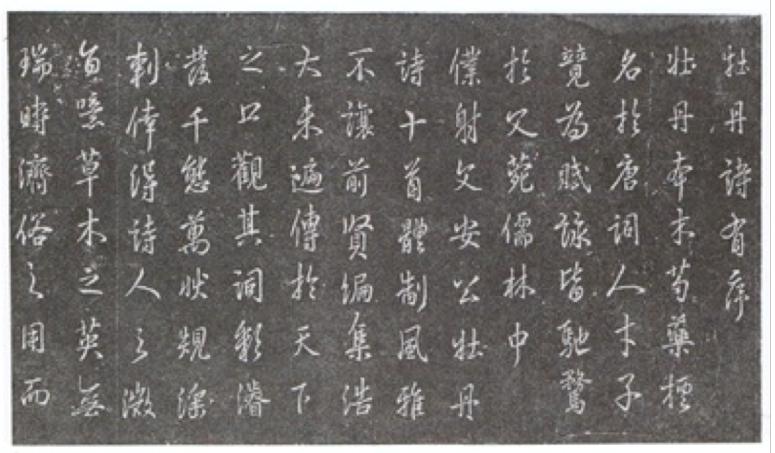
李邕の最もすぐれた行書である。28行、毎行56字。

字大約3cm。嶽麓寺碑とも呼ばれる。湖南省長沙の嶽麓書院に

現存する。撰文は李邕ではないようである。碑刻は李邕自身といわれる。

※「雄渾」・雄大で勢いのよいこと。よどみなく堂堂としていること。

またそのさま。



法華寺碑（開眼 23年・735）57歳の作。行書碑。撰文も刻も李邕。法華寺の創建者の僧・曇翼の頌徳碑。原碑は亡くなつた。翻刻では、23行、毎行52字。元の趙子昂が特にこの碑を珍重した。

八舍下及果日
初上相先忽陵
乘六牙衛ハ部
勝幡虹引炒樂

李思訓碑（開原 27年・739）

「雲麾將軍李思訓碑」が正式名。李思訓の頌徳碑。李思訓は唐の宗室の出身。北画の祖といわれる画家である。李林甫は甥。王法を基本とした行書。字大約4cm。右肩上がりで、縦長の字形が特徴で豪快奔放。李邕61歳以後の作か？碑高は342cm、幅は145cm。碑文は30行、各行70字、約2000字。陝

西省蒲城県橋陵に現存。

唐故雲麾將軍
右武衛大將軍
贈秦州都督
李思訓碑



李邕の行書と王羲之の行書の比較

大將軍

李思訓碑

大一百一

集字聖教序より



娘心恨處石鍾教謗虎性裏
惡匪羈礼義博戲考業膺
大為事遊侠無賴奢慳才
餘不仕因采荔諾罪福醉飲

くうかい ろうこしいき
空海「薦誓指帰」部分

及室山集會一虛量高仙
法大ゆゆゆゆ矣達法幢報

空海・「風信帖」部分

人生燭上並光滅巧妍盡春風
繞樹頭日占坐進只知雨露貪不
因寒蕭蕭我若飛晉日慘見
當塗墳青松爲祖靈經年
山下村歌聲月魄無復波

蘇軾「李太白仙詩卷」(宋・1093)

大宗師張公
則以方外顯
矣公諱留孫
字師漢系出

趙子昂「張留孫碑」(元・1329年)

高野山大門の大額の「高野山」の字はこれか
ら集字された。李邕の書を日本に伝えたのは
吉備真備であり、その子の朝野魚養が、その
斬新な李邕の書を空海に教えたと想われる。
王羲之と並んで李邕は和様漢字の基になっ
ている。

賀知章

(659-744) 会稽

(浙江省)

の人。詩文、草書

と楷書がうまかつたらし

い。武則天、玄宗に仕えた。

のとき官を辞め、故郷に隠退した。酒好きで四明狂客と号し、

張旭や李白らと交際し、自由に暮らし

た。杜甫の

「飲中八仙歌」

の冒頭で歌われている。

84歳

孝經

「草書孝經」

ともいう。古法(王法)

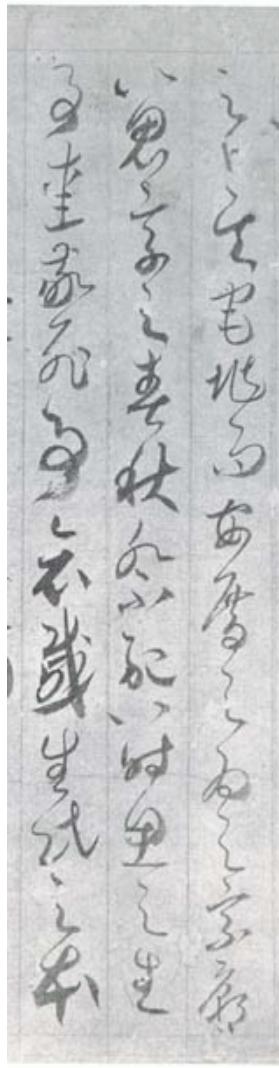
から新法への過渡期の草書。江戸時代中ごろ日本に渡來した。現在は

三の丸尚蔵館蔵。

※「孝經」・孔子の言動をしるしたとい

う十三經

のひとつ。孝道について述べている。



之。ト其宅兆。而安措(「」に昔になつてゐる)之。為之宗廟。
事愛敬。死事哀感。生民之本(尽)・・・

以鬼享之。春秋祭祀。以時思之生

古法と新法

古法とは一王の書法のことであり、新法とは顔真卿の書法のことであるとされるが、それが何であるのかについては諸説あつて明確ではない。新古の別はさておいて、この時代は中国書道史上最大の転換期である。張旭→顔真卿→懷素と継承された新しい書法は王羲之以来の草書法を革新するものであった。張旭が創出した連綿草は懷素を経て日本に伝わり、かな連綿や良寛の書などを生み出している。また古法と新法の対立ではなく、王羲之→褚遂良→顔真卿という正当な流れとして書道史をとらえることも可能だと考えられる。

狂草の誕生（革新派）

唐代の芸術の転回

李邕が保守派の代表なら張旭は革新派の代表であり、芸術としての書の開拓者（先駆者）である。二王の書が形式化して本来の精神を失つてきたとき、伝統を破壊しようとする新しい動きが起つてきた。数百年来つづいてきた貴族社会を基盤として栄えてきた王羲之書法や文学、芸術は貴族社会の崩壊とともに新しく変化して行く。張旭（生没年不詳だが、開元・天宝時代の玄宗朝の人）字は伯高。張長史とも称される。呉郡（江蘇省）の人後漢の張芝と同様、草聖と呼ばれているが、真偽不明の作品しか残つていない。李白、賀知章と親交があり、杜甫は彼の書の支持者であった。杜甫の「飲中八仙歌」で歌つているように、酒豪で草書の名手であった。大醉いし大声や奇声をあげて走りまわつて書をかいたと伝えられる。ときには髪に墨をつけて草書の大字を書いたらしい。その草書は狂草体と呼ばれる。このような奇行から懷素と共に「張顛素狂」と並称された。酒をかりて作品をつくることは、書だけでなく詩文や絵画をつくる作家の間に流行していたようだ。彼らは、師法に依らないで自然や現実に書法の発想を求めた。反王羲之的な革新的な書法を折釦股、屋漏痕、壁坼とよぶ。張旭は、これまでの書家と違つて、王羲之の權威を認めなかつたが、しかし張旭は王羲之の法を基礎にした楷書をもつて狂草を書いた。李陽冰・顔真卿は門人である。

嚴仁墓誌

楷書 原石は52・5×52・5cm 全21行、各行21字、全430字一九九一年河南省偃師県で出土。

悲嗣子憲昌莘
貞琰其詞白
名大位未躋芳
忘情孝子之林

※「今世、草書を善くすと称するもの、あるいは真、行をよくせず。これ大妄なり。真は行を生み、行は草を生む。真は立つ如く、行は行く如く、草は走る如し。未だ、行、立をよくせしして走をよくするものあらざるなり。」（蘇軾・「東坡集」卷23より）

五言蘭亭詩 陸東之書

郎官石記（開元29年・741）楷書 「郎官石柱記」などともいう。

原石は現存しない。郎官に任命された人とその年月を記した序文。

※郎官・皇帝の身辺警護などを勤める役人。

我蓋取隨時班位以

序昭其度也豈約從

宜昭其儕也碑夫金

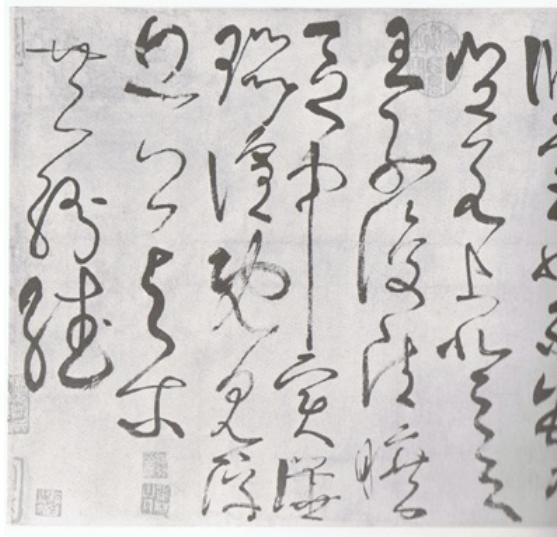
※張旭は虞世南の甥の陸東之の子（？）の陸彦遠から「東之の書法」を授けられた。陸東之は虞世南から書を学び、初唐の四大家と呼ばれることがある能

草書古詩四帖

(伝張旭)

狂草の名品。約29×約195cmの巻子仕立。

5種類の色紙を継いだもの。遼寧省博物館蔵。



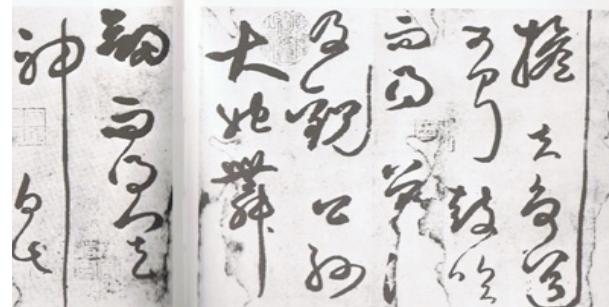
豈若上登天
王子復清曠
區中實譁
囂誼既見浮
丘公與爾
共紛繙

白言帖 (開元2年・714) 伝・張旭 約60字からなる。

内容は自身の書風を創りあげた契機について述べたもの。王法による正統な草書体。



ひはく
飛帛



千字文 伝・張旭

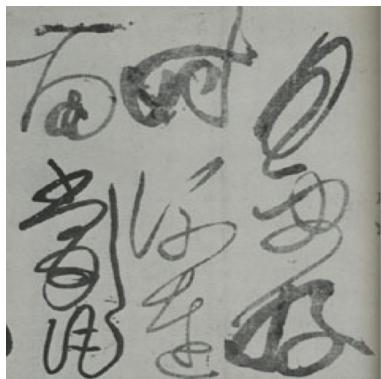


游鯤凌摩霄耽讀翫市
（遊鶴）獨運凌摩
絳霄耽
讀翫市
市に遊び、
遊鯤は獨り運
り、絳霄を凌
摩す。耽讀して



空海・「崔氏玉座右銘」

部分 々内含光

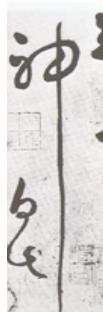


日本への影響

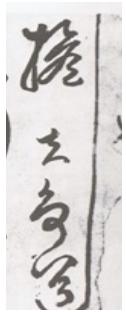
錐画沙とは砂に垂直に錐を立てて書くようにしつかりと力強く書くこと。すいかくさ

藏鋒・中鋒の比喩か。ぞうほう・ちゅうほう

壁塙とは布置のことらしい。

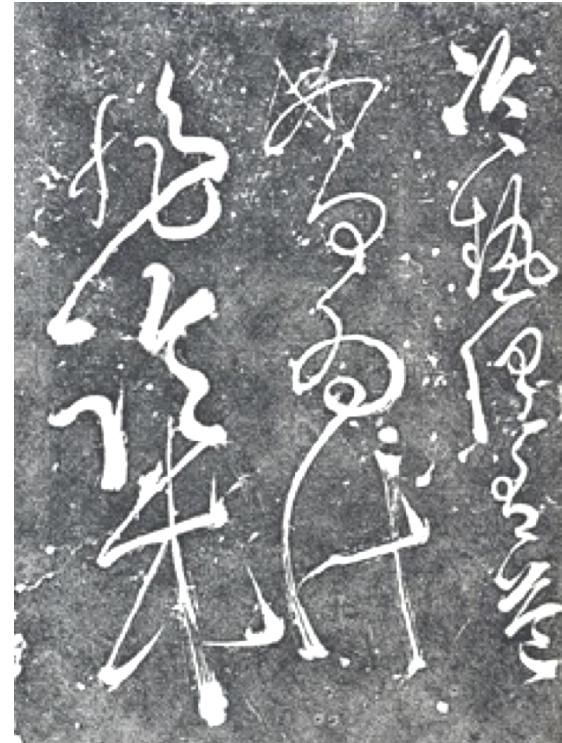
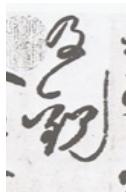


屋漏痕とは



反王羲之書法の折釵股、屋漏痕、壁塙

折釵股とは釵の股(柄)の形をとつて書をかくことらしい。



空海『性靈集』より

書の時間性。流れる時。自然の移り変わり。自然崇拜。

「取法四時、象形萬類。此為妙矣。」

これ
もつ
みょう
な

四季に運筆の法を則り、万物のさまざまな形象に文字の形勢を似せなくてはいけない。そうであつて、書の優れた表現とする。※四時（四季）・・・自然の生命力の創造作用。自然の運行の秩序。

王法（王羲之法）



「集字聖教序」より



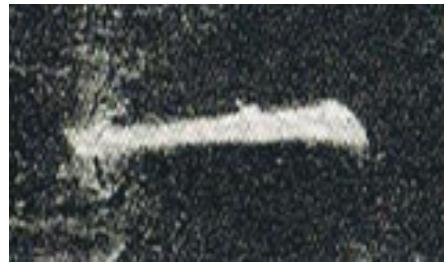
王羲之「孔侍中帖」より



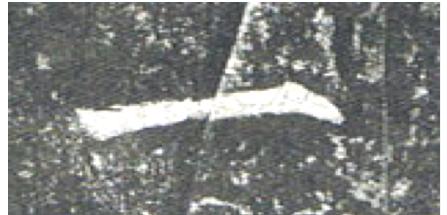
王羲之「寒切帖」より



智永「真草千字文」より



歐法



李邕「李思訓碑」より



歐陽通「道因法師碑」より





李邕「李思訓碑」より



「孔子廟堂碑」より



歐陽通「道因法師碑」より



「雁塔聖教序」より



「九成宮醴泉銘」より



「顏勤礼碑」より

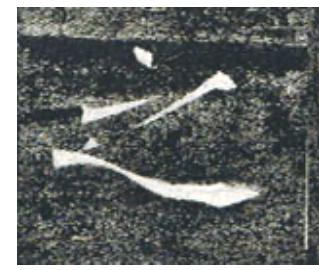
転折とはね



「九成宮醴泉銘」より



顏真卿「顏勤礼碑」より



「雁塔聖教序」より



歐陽通「道因法師碑」より



智永「真草千字文」より



「孔子廟堂碑」より

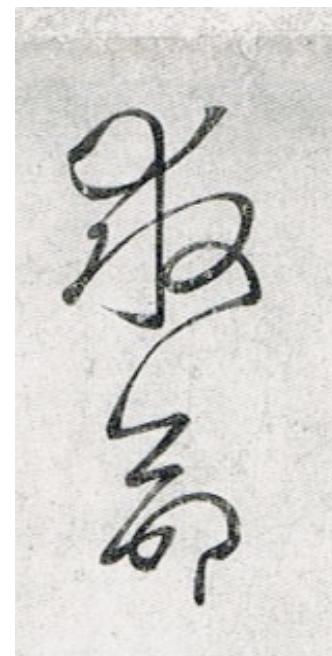
結構法



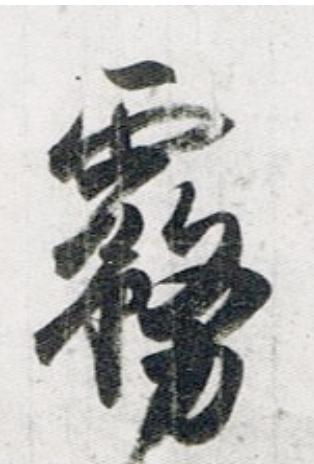
「李思訓碑」より「崇」



「李思訓碑」より「家」



王羲之「遠宦帖」より「求」



王羲之「得示帖」より「霧」



王羲之「憂懸帖」より「憂」



「九成宮醴泉銘」より

